

スラブ語圏学習者から見た日本語の漢字の世界

スネジャナ・ヤンコヴィッチ

はじめに

現代日本語の文字形態は、近代諸言語の中でもっとも複雑であると言われている。日本語においては、いわゆる「話し言葉」と「書き言葉」というものがある。さらに、三つの異なった文字形態——漢字、ひらがな、カタカナ——が使用される。それゆえ、日本語学習者の中においても、日本語を話す事ができて、書く事のできない者が多く存在する。日本の新聞を見ると、この三つの文字形態が一緒に使用されていることが分かる。しかも、一つの単語の中においても同時に使用される事もある。たとえば、「消しゴム」という言葉には、「消す」という動詞の語幹は漢字で書かれ、「し」はひらがなで、外来語の「ゴム」はカタカナで表記されている。しかし、ひらがなとカタカナはたった50音ずつを持っている文字形態で、大学のコースでわずか一週間で習得が可能である。日本語とその文字形態を習得する際に最大の困難というのは、漢字の習得だと言える。

日本語学習者でもとりわけスラブ語圏のような非漢字文化圏の学習者にとって、漢字の学習は困難を極める。アルファベットのような表音文字が持つ形態的特性や表記特性が漢字とは全く異なるからである。

スラブ諸語は通常、東スラブ諸語（ロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語）、西スラブ諸語（ポーランド語、チェコ語、スロバキア語、ソルブ語、カシューブ語）、南スラブ諸語（セルビア語、クロアチア語、スロベニア語、マケドニア語、ブルガリア語）に三分される。私の母国語は南スラブ諸語に属するセルビア語である。現代セルビア標準語は、セルビア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロの大部分の地域で古くから話されてきた南スラブ諸方言の一つが標準語化されたもので、同じ方言を基盤に成立した現代クロアチア標準語と言語学的に最も近い関係にある。スラブ諸言語は、表音文字、なお、単音文字の文字形態を用いている。セルビア語では、ローマ字とキリル文字両方の30ずつの簡単な文字形態が用いられる。

スラブ語を母国語とする学習者はヨーロッパ諸言語の学習の際には、短時間で文字形態やその読み方を習得する事ができる。しかし、日本語の場合においては、大学入学から卒業までの四年間、漢字習得のための継続的な学習が必要である。限られた時間の中で約2000単漢字と熟語を学習するのはなかなか難しい。しかも、新聞及び書籍には常用漢字以外の漢字が使用されていることにより新聞及び書籍を通しての語彙増強、文法構造の理解が妨げられ、日本語の習得はヨーロッパ諸言語習得と比較すると遅れがちであると言える。ユーゴスラビアで行われた外国語教育に関する研究発表によると、スラブ語圏からの学習者は、日本語及び中国語の習得において、英語やドイツ語などのインド・ヨーロッパ諸言語の習得に要する時間の四倍をあてているという事である。その主な要因は、writing systemにあると言って良いであろう。

本発表では、スラブ語圏学習者から見た日本語の漢字の世界、その難解な部分と魅力的な部分、インターネット普及による簡易化と新たなニーズについて考察していきたいと思う。

1. 漢字の勉強の仕方

私は、ユーゴスラビアにあるベオグラード大学の日本語学科を卒業した。最近、ユーゴスラビアの若者の中で日本語に対する関心が増し、毎年100人前後の学生が日本語学科に入学するが、卒業できるのはその三割程度である。日本語の学習は、初期段階において直面する漢字習得の問題で、難解であり、進歩が見られず、会話において限定された語彙及び文法しか適用できない期間が比較的長いため、多くの学生は一年後に大学をやめるか、学科を変えることになる。日本語の学習を継続する学生にとっても最大の難関は漢字の習得である。ひらがな及びカタカナの習得が比較的容易であるという事に対して、漢字習得は時間と努力を要するとても長いプロセスである。一年目には、基本的な400の漢字を習得する。二年目以降、漢字の基本的概念の習得により、もう少し早

い進度の漢字習得を行う。主な学習方法は書くという作業の反復である。

2. 漢字の魅力的な部分

非漢字文化圏であるスラブ諸語を母国語とする日本語学習者にとっての日本語における漢字の役割は魅力と難解さに満ちている。多くの学習者は「エギゾチック」な漢字に引かれ、日本語の学習を始める。漢字があるからこそ、日本語は面白いと考える学習者も少なくはない。その魅力の一つとして、漢字は、音声のみ表すキリル文字及びローマ字と異なり、言葉の意味をも表すことにあると言える。漢字、ひらがな、カタカナの三つの文字形態の中で瞬時に意味及び情報が伝わるのは漢字である。漢字を見するという行為のみによって、色々な事が想像できる。読み方の分からない漢字の場合においても大体の意味を推測できる事は多々ある。漢字のビジュアルで美的な役割はスラブ語で使用されている文字形態とは大きく異なっている。そのダイメンションは、文学及び詩歌という分野において特に表現力を持ちうる。

3. 漢字習得の困難である部分

漢字習得の困難である部分をいくつかに分けて考察していきたいと思う。

3. 1. 形が多彩

漢字圏の日本語の学習者と比較し、漢字の形に慣れ親しむという点において、非漢字文化圏の初期段階での知覚的な不利は大きいと思われる。非漢字圏の学習者は、日常生活で漢字と接触することが全くないからである。漢字習得の際に、まずその形および正しい書き順を覚えなければならない。画数の多い漢字の場合は、その形と書き順を正しく覚えるのは大きな困難である。さらなる問題としては、形は似ているが意味が異なる漢字が非常に多い点である。一例として、「祭り」と「際」、「試す」と「式」などが挙げられる。このような漢字の識別は、非漢字圏の学習者にとって非常に難しいものだと思う。

3. 2. 漢字の形の知覚学習と記憶に関して

漢字の形の記憶は、日常生活で全く漢字と接触する機会のないスラブ語圏学習者にとって、大きな問題である。この問題を克服するために、形の知覚学習の弁別と識別方法を使用している。弁別とは複数の形を違ったものとして知覚する事、識別とは一つのまとまった形として認識する事である。たとえば、「大、犬、太」の三つの漢字形の違いが分かるのが弁別、それぞれの漢字形をそれとして認識できるのが識別である。なお、この例のように「、」は弁別に必須であるということで、これを弁別特性と呼び、「大」を漢字形のまとまりの知覚に必須であるという事で識別特性と呼ぶ。日本語学習者から見ると、漢字では、一画が弁別特性、部首が識別特性として機能しているように思われる。

非漢字圏の学習者にとっては、漢字形の基本要素単位を同定し、それを形の知覚学習の基礎に捉える事が有効な学習方法である。これが記憶の体制化を強力に支援する。さらに、形のみでの記憶ではなく、意味的な手がかりも記憶の手段となる。これらの点を踏まえても、漢字の形の複雑さ及び莫大な数は、膨大な記憶負荷を課す事になる事は言うまでもない。

3. 3. 漢字の書字に関して

文字は「読める」だけでなく、「書ける」必要がある。文字を書くという点で、漢字は、日本人にとっても、決して楽な作業ではないようである。実際、「読めるが、書けない漢字」がかなりの数にのぼりつつあると言われる。ワープロの普及がこの問題からの脱却を支援してくれるようになっている。

しかし、漢字学習に当たり、特に日常生活で漢字と接触する事もない非漢字文化圏の学習者にとって、書く事によって学ぶ事は非常に大切な学び方の一つである。事実、繰り返し書くという作業が非漢字圏の学習者にもっともよく使用されている学習方法である。繰り返し書くという方法を使用しなければ、せっかく覚えた漢字を短

期間で忘れてしまうことになる。

3. 4. 形音義の関連が複雑である

表音文字を使う言語体系では、音義一体で、文字は付属的な役割しか果たさないが、表意文字を使う言語体系では、形音義一体である。文字形の中に意味も音も表示されている。非漢字文化圏の学習者にとって、文字についてのこの構造的な違いは、多くの戸惑いと学習上の困難をもたらす。

3. 5. 多様な読み方に関して

音読み・訓読み、音読みにおいても複数の読み方の存在、さらに熟語によって異なる読みがある。漢字の読み方のこうした多様性は、非漢字圏の学習者にとっては、大きな困難をもたらす。たとえば、「日本」と言う地名も「本日」と言う単語も同じ漢字を用いて書く。しかし、書く順が逆だけで、漢字の読み方も違って来る。「本日」は、「日本」の例に習って、「ほんに」とは読まないのである。たとえば、「明るい」という漢字はいくつかの読みを持っている。「めい」と「みょう」は音読みで、「あかるい」と「あける」は訓読みである。熟語には両方の音読みが使用される（明白、明日）。「明け方」という単語には訓読みが使用されている。漢字の読み方の使用に関する明白かつ完全な規則がないのは、日本語学習、漢字学習上に大きな困難をもたらす。

3. 6. 同音語に関して

日本語は、音節構造が単純で、しかも、音節の種類が少ないため、同音語が多く存在する。複雑で、豊富な音節を持つスラブ語学習者にとっては、日本語のこの特性は、日本語の語彙学習に多大な困難をもたらす。スラブ語には同音語の数は非常に少ない。セルビア語には、その例はわずか五つほどである。しかし、日本語の場合は、同音異義語が多いので、ひらがなだけで書くと、誤解しやすくなる。たとえば、「はし」といわれても、「食べる箸」なのか、「端っこ」なのか、「渡る橋」なのか分からない。「かえる」、「はなす」などの例も同様である。これらの言葉は、漢字で書かなければ、意味の伝達および理解が困難なケースが多い。「かえる」なら、「場所を変える」、「家に帰る」、「何でも買える」、動物の「蛙」などがあり、「はなす」は、「本当の事を話す」、「目を離す」などがある。このような同音異義語の場合は、表意文字である漢字の方がはるかに意味がわかりやすいのである。

同音異義語だけでなく、一つの漢字が多数の熟語で使われていることも日本語学習上の大きな問題の一つである。なぜかというと、似ている単語の数が多いからである。たとえば、「かんせい」の「完」という漢字は、他に「完了」、「完全」という単語にも使用されている。「警官」、「官僚」、「官庁」という言葉にも共通の漢字「官」が用いられている。これは、正しい記憶と意味の区別の妨げになる事が多々ある。

また、いくつかの漢字が同様の読み方を持つという事も困惑をもたらす。たとえば、「観光」と「環境」の漢字は違うが、音声には共通の部分がある。スラブ語を母国語とする学習者の感覚からすれば非常に似ている単語で、記憶と区別が難しいわけである。「健康」と「検討」も同様である。

スラブ語圏の言葉を母国語とする学習者は、日本語の単語を聞くと、音声と文字に分解する。しかし、この場合の文字は、スラブ系の母国語にある単音文字形体で、一音節に一文字の事である。したがって、「かんきょう」という言葉は、「環」と「境」に分解するのではなくて、k-a-n-k-y-o-uに分解する事になる。「かんこう」は、「観」と「光」ではなくて、k-a-n-k-o-uに分解する。故に、k-a-n-k-y-o-uとk-a-n-k-o-uは、音声の面から分析すると、やはり「似ている言葉」となる。このことは、日本語の発音にも影響を及ぼす。単語の中で、どこまでが一つの概念を意味するのかが判別しがたいため、発音に支障をきたすことが多々ある。

3. 7. 漢字の使用方法が複雑である

語彙に対応する文字群が存在する事は、いかなる文字圏の言語を学ぶ者であってもかなり早くから認識している。しかし、日本語の場合は、その語彙のうちどれを漢字で表記すべきかを学習しなければならない。これは、非漢字文化圏の学習者にとってはかなり困難を伴う学習である。また、一つの漢字はいくつかの意味を表す事ができる。その場合は読み方も違って来る。一例を挙げると、「うむ」と「しょうじる」という漢字は同じである。しかし、意味は勿論のこと、読み方も異なる。「分かる」と「分ける」という漢字も同様である。

3. 8. 地名、人名の読み方に関して

地名、人名の固有名詞の漢字の読み方が大きな問題である。たとえば、電話で相手の名前や住所を聞いた場合、漢字でどのように表記すべきか分からないことが多い。また、漢字で書かれた地名及び名前を見ても、正しい読み方が分からないケースが非常に多い。

3. 9. 漢字の象形性に関して

漢字の象形性は、漢字の初期学習においては大いに支援になる。たとえば、象形性の高い漢字（山、木、森、川など）の記憶と学習は早いと思われる。しかし、象形性の高い漢字は主に具体的概念を表している。抽象的概念を表している漢字の象形性はそれほど高いものではない。たとえば、「幸福」、「世界」など抽象的、観念的な概念に使う文字の記憶と習得は具体的概念を表している文字より難しいと思われる。

4. ワープロ、インターネットの普及と漢字学習

多くの日本語学習者は、日本語がより普及するためにはどうしても漢字の簡易化が必要だと考えている。日本語から基本的に漢字を廃止し、ひらがなとカタカナ表記、あるいは日本語のローマ字化を呼びかける日本語学者もいる。

一方、ひらがなさえ知っていれば、日本語でコミュニケーションはできるという事も事実である。しかし、その場合は、いくつかの問題が出てくる。同音語をいかに区別するかという問題がその一つである。ひらがなのみで表記されたものは、かえって理解が困難になるという意見もある。漢字がいかに難解であろうとも、日本語の現状においては、特に同音語の判別においては象形的特性が大きな役割を果たしているのも事実である。ローマ字化の場合も同じ問題が生じる。さらに、発音の問題も生じると思われる。母国語でアルファベットを使う日本語学習者にとって、ローマ字の日本語の表記は、発音上障害になって、日本語の音をうまく出せない場合が多く見られる。日本語学習の初期段階では常にヘボンのローマ字化が使用されている。学習者は、その場合、単語と単語の区切り及び関連がうまくつかめず、間違っただけあるいは不自然な発音をすることが多く見られる。漢字で書かれた同じ文章を読むことによって、発音が改善されることが多々ある。

ワープロやささまざまなコンピューターシステムの普及が日本語の漢字をめぐる状況を大きく変えたと言える。最大の変化は漢字を書く必要が消失したことである。

スラブ語圏の諸言語では、文字の読みと書きは、一体で考えられている。しかし、日本語の場合は、実際は、使用される漢字の数の増加に比例し、「読めても書けない漢字」も増加し、そのことが漢字使用上の問題になっていた。この問題からの脱却がワープロによって成し遂げられたといえる。

この事は日本語学習者にとっても同じく大きな意味を持つ。複雑な漢字を書かなくてもすむ状況の出現は、認知負荷の軽減になる。とりわけ、音声ベースのスラブ語圏の日本語学習者にとっては、その軽減効果ははかりしれないものがある。漢字の書き取りが困難である外国人でも、ワープロの普及によって、簡単に漢字による表現が可能である。書く事のできない画数の多い漢字でさえも、ひらがなで入力すればボタン一つで簡単に出現する。しかし、その場合の条件は、漢字の読み方を正確にひらがなで入力できる事、一つの読み方の入力によって出現する複数の選択肢の漢字の中で適切なものを選択できる能力である。

ワープロ及びインターネット普及によって非漢字文化圏の日本語学習者にとって有利な点は以下の通りである：

- ・漢字を書かなくてもすむこと
- ・各種ソフトの開発によって、読み方の分からない漢字の検索も辞書で調べるよりも便利かつ迅速
- ・読みにくい地名及び名前の読み方の迅速な検索

問題は、「書く事によって習得する」漢字学習の王道とどのように折り合いをつけるかである。漢字を繰り返して書くという行為の省略によって、書き取り能力の低下が起きる。ワープロ及びパソコンへの依存によって、漢字のいわゆる active knowledge が低下し、passive knowledge に変わる可能性が高くなる傾向が見られる。その結果、日本語学習者の中では、同じ読み方を持つ漢字選択肢の中から正しい漢字の選択ができなくなったり、

形の似た異なる漢字を使用してしまう可能性が高まる。

おわりに

日本語における漢字の難解さは、日本語学習者の増加を妨げる要因となっているとしばしば指摘される。インターネットの普及、各種ソフトの開発によって漢字をめぐる環境は大きく変化しつつあり、将来日本語の教育及び学習に重要な影響を与えるであろうと思われる。

スラブ語圏日本語学習者にとって、漢字の習得の難しさの原因はもう一つある。スラブ語圏の諸国では、日本学及び日本語学はまだ新しい分野の学問である。文献、辞書、各種資料の入手も容易ではない。インターネットや各種ソフトの普及によって辞書なしで漢字の読み方及び意味の検索が可能になったという点が非常に便利なことである。

ワープロソフト普及がもたらした学習者にとって難解である漢字表記の簡易化、インターネットによる検索等、利便性、学習方法の増加が日本語学習者の増加、日本語の国際化に大きく貢献するであろうと思われる。

参考文献

- Henshall, Kenneth G. (1990) 「A Guide to Remembering Japanese Characters」 Charles E. Tuttle Company
エツコ・オバタ・ライマン (1990) 「日本人の作った漢字」 南雲堂
Seely, Christopher (1991) 「A History of Writing in Japan」 E. J. Brill

スネジャナ・ヤンコヴィッチ (Snezana Jankovic)

1970年生まれ。ユーゴスラビア連邦共和国。ベオグラード大学言語学部日本語学科修士課程終了。在日ユーゴスラビア連邦共和国大使館文化担当書記官。日本語学専攻。日本語に関するセルビア語論文に「The state of things in the Serbian-Japanese Lexicography」(「Zaduzbina」, 75号, 1995)、「The writing system in Japanese Language」(「Svet reci」 1号, 1997) の他、日本文学作品のセルビア語訳。